

# 李白の「静夜思」をめぐる

## — 中国での本文と解釈を視野に入れて —

丁 秋娜

キーワード：楽府、望郷、床、月、井戸、民俗イメージ

**【要 旨】** 李白の「静夜思」は、その名高さと表現の平易さにより、日本でも中国でも漢詩（古典）の入門教材として使用されている。本稿では教材研究を深めるために、新しい視点からこの詩の解釈を取り上げる。

まず、日中両国に普及している詩の本文に相違があり、中国では「明月」という言葉が2回出てくる。李白の使った「山月」が後に「明月」に変更されたことから、一般庶民の「明月」に対する愛着を見ることができる。

従来、「望郷」のシンボルとして「月」を重点的に捉えるのが一般的であるが、今回は詩の冒頭の「床」に焦点を当ててみたい。「床」には①寝台・ベッド、②胡床（腰かけ）、③井床（井戸囲）、の3つの意味があるが、唐代の建築や井戸の民俗イメージなどを勘案すると、この詩にある「床」は「井戸囲み」と解釈する方が適切と思われる。実は「月を以て人を思う」「井戸を以て故郷を思う」という解釈が中国の古典文学によくあるパターンである。

### 一. はじめに

李白の「静夜思」は日本においても中国においても、「望郷の詩」として極めて有名である。朱炯遠の『唐詩三百首訳注評』<sup>1)</sup>では、「静夜思」は「千古思郷第一詩」と崇められている。素朴に仕上げた民謡風の詩ではあるが、印象が鮮明で、詩人の「故郷を思う」心情が千年もの間人々の心に生き続けてきた。表現の平易さにより、中国では、小学校1年生の国語教科書に採用されている。日本では高等学校の漢文教材として取り上げることが多いが、いずれも「静夜思」を古典（漢文）学習の入門教材として位置付けている。その授業は音読—簡単な解説—音読というパターンで行われるのが多くて、唐詩に親しみを持たせるのを目的に教えられるのが一般的である。

「静夜思」は表現が単純であるため、この詩を深く研究する必要がないと思われがちであるが、本稿では、中国における解釈に視野を広げ、この詩を改めて考えたい。主に以下の2つの課題に分けて検討する。

- ・課題1 日中両国に普及している詩の本文に相違がある。なぜ違う版本が出てきたのかを追究する。
- ・課題2 詩の冒頭の「牀」（以下は「床」で統一する）を「寝台」・「ベッド」と解釈するのが一般的であるが、新しい解釈を提案し、検証する。

## 二. ジャンルと創作について

「静夜思」という題名は楽府題の一つである。楽府というジャンルは、一口に言えば民間歌謡である。楽府はもともと、漢の武帝が設立した音楽をつかさどる役所の名前であった。音楽の振興を目指し、各地方の民間歌謡を採集した。後世、そこに収録された詩歌を「楽府」と呼ぶようになった。楽府は民間に流行し、そして音楽に合わせて歌うものであったから、歌詞は単純で短いのがふつうである。しかしその単純で短い中には、「『社会性』と『叙事性』とを濃厚に帯びている」<sup>2)</sup>と評されるように、素朴な力強さが楽府の生命である。

唐代における最大の楽府作家である李白は、230首の楽府詩を作ったが、それは彼の詩の全体の約4分の1を占めている。「蜀道難」「烏夜啼」「城南に戦う」などに代表されるように、名作が非常に多い。武部利男は『李白』<sup>3)</sup>に、「楽府の詩形が五言から七言を基調としながら長短句入り混じることを許され、形式の制約が少ないため、李白のあふれ出る発想にうまくマッチするからである」と述べているとおり、楽府は李白のもっとも得意なジャンルと言える。

「静夜思」は、明代の李攀龍が編著者とされている『唐詩選』に収録され、『唐詩選』が日本に伝来するとともに、この詩も日本に伝わってきた。李攀龍は『唐詩選』の序文に「五七言絶句の如きに至りては、実に唐三百年一人のみ。蓋し意を用いざる（不用意）を以て、これを得たり。即ち太白も亦た自らその至る所を知らず」と言い、絶句において李白は唐代三百年の第一人者であり、その詩は彼自身も自覚しないうちに高度な境地に達したと称賛している。服部南郭は『唐詩選国字解』で、その「不用意」を「自然の妙境」と解説している。明の胡応麟がその著『詩藪』の中で、「太白の五言、『静夜思』『玉階怨』等、古今に絶妙たり」とし、清の宋宗元が『網師園唐詩箋』に、「天趣を得たり」と記している。学者たちは口々に「自然の妙境」「絶妙」「天趣」など、詩歌の創作における最高の賛辞を「静夜思」に用いている。

この詩の作成について、明の梅鼎祚は『李詩抄』に、「偶然にして之れを得たり」と評している。はたしてそうであろうか。実際には「静夜思」は古詩や前代の楽府から影響を受けて作られたという意見は多数の論文や著書に述べられている。日本の場合は、武部利男や森瀬寿三の指摘が挙げられる<sup>4)</sup>。「静かなる夜にものを思う」というモチーフは、唐代以前の詩作品において数多く用いられている。以下、その例を挙げる。

- ・明月何皎皎、照我羅床幃。憂愁不能寐、攬衣起徘徊

(明月 何ぞ皎皎たる、我が羅の床幃を照らす。憂愁して寝ぬる能はず、衣を攬りて起ちて徘徊す)  
(古詩十九首「其十九」、『文選』第29巻)

- ・昭昭素明月、暉光燭我床。憂人不能寐、耿耿夜何長

(昭昭たる素明の月、暉光 我が床を燭らす。憂人 寝ぬる能はず、耿耿として 夜 何ぞ長き)  
(魏・曹叡「傷歌行」、『文選』第27巻)

このように、月が何々を照らすというのがよく見られており、「床前看月光」の雰囲気と似通っている。また、「拳頭望山月、低頭思故郷」の2句は次の句と類似している。

- ・俯視清水波、仰看明月光

(俯しては清水の波を視、仰いでは明月の光を見る)

(魏・曹丕の雑詩、『昭明文選』第29巻)

李白は「俯視」を「低頭」に、「仰看」を「挙頭」に変えたと考えられる。

古詩十九首は東漢後期に作られたもので、それまでの五言詩の最高成果と言われている。曹丕と曹叡は六朝の「建安の風骨」<sup>5)</sup>を代表する詩人である。李白は漢魏と六朝の詩人たちの詩に学ぶところが多い。李白・杜甫によって代表される「盛唐」の詩が、「建安の風骨」の継承であり、その精神の新たな開花であるとする考え方は、今日の文学史の常識になっている。しかし、李白の「古風五十九首 其一」にある「自从建安来 綺麗不足珍」（建安よりこのかた、綺麗にして珍とするに足らず）という詩句に表しているように、李白は詩論において復古主義者であり、六朝の濃厚な修辭主義傾向には反対で、樂府詩の素朴な詩風に復することを主張していた。

李白は前代の樂府や古詩を学んだが、決して単なる模倣ではない。以上に引いた3首の詩は、いずれも一部しか引用していないが、その全詩は「静夜思」に比べて形が長く、表現が深遠で理解しにくい。李白は樂府題を用い、古いモチーフを活用しながらも、本来樂府が持っていた性格を發展させ、独自の詩を作り出している。

### 三、日本と中国に通行している詩の本文の相違について

日本の教科書に取り上げられている「静夜思」と中国の人々が受容してきたテキストとは字句に違いがある。

【日本】 床前看月光、疑是地上霜。挙頭望山月、低頭思故郷。

【中国】 床前明月光、疑是地上霜。挙頭望明月、低頭思故郷。

(傍線は引用者による。以下同じ)

中国では、「床前明月光」「挙頭望明月」としている。日本は前者の「明」を「看」、後者の「明」を「山」としている。詩の伝統的規範として、「同字の禁」、つまり、絶句の中に同じ字を使ってはならないという規則がある。「静夜思」は「古体絶句」に属して、句法や平仄・韻律は自由であるが、「月」も「頭」も2度出てくるので、中途半端な絶句と言わざるを得ない。一方、日本も中国もルール違反しているが、日本のほうが「月」のみで、中国の「明月」より罪が軽いと言えよう。

どちらが李白の創作した本文なのか、という問題に関しては、森瀬寿三の「李白『静夜思』と李攀龍『唐詩選』一日中間のわずかな違い」<sup>6)</sup>に詳しい考察がある。結論を言うと、日本に伝承されたものが原文であり、現在中国で流布しているものが変更されたものである。明代の李攀龍が『唐詩選』（万曆刊本）を翻刻するに際して、第1句を「床前明月光」、第3句を「挙頭望明月」に改めたと考えられる。その版本が当時の人々に受け入れられ、やがて清朝に入り、蘅塘退士が『唐詩三百首』を編集する際、「床前明月光」「挙頭望明月」の文を受け継ぎ、それ以降中国ではほとんどの書物がこのテキストを採用するようになったという。一方、日本では江戸元禄期に服部南郭が『唐詩選』の和刻本を校訂する際、他の版本を参照して原文どおり「床前看月光」「挙頭望山月」の文を用いており、これが『唐詩選』の流行とともに日本に普及してきたと森瀬は述べている。

現代中国の人々が親しんでいる「静夜思」はその原型と比べて、「詩」として劣っているかもしれないが、中国では老若男女を問わず誰もが知っている名作である。一方、「明月」が2回出

てくることについては、研究者たちからいろいろな意見が述べられている。例えば、以下のような指摘が挙げられる。

原形とは合わないが、芸術的には確実にこちらのほうが優れている。このように変更すると、詩により含蓄と韻律美をもたらし、より普遍性を与え、広範な読者に好かれ、より容易に受容される。

(郁賢皓主編『李白大辞典』広西教育出版社、1995年版)

「明月」は2回出てくるが、決して重複感がなく、リズムの循環性を表現している。そして、「看」と「望」との重複を回避している。

(傅璇琮主編 葛兆光選注『中国古典詩歌基礎文庫 唐詩卷』浙江文芸出版社、1996年5月)

このように、「明月」の重複はこの詩の「傷」として避けられるどころか、この言葉が2回使用されることによってより一層芸術性をもたらしたと見られている。

さらに、中国李白研究会<sup>7)</sup> 会長である薛天緯氏は、次のように指摘している。

文人の詩の中では、月を「山月」「海月」に分けることが多く見られるが、「明月」は庶民の目から見た月である。(中略) 明代の李攀龍は李白の詩の中の「山月」を「明月」に変えたのは、この詩をもっと通俗化するためであろう。

(薛天緯「漫説『静夜思』」『文史知識』、1984年第4期)

月を文人の目から見たものと庶民の目から見たものに分けることが興味深い。李白は楽府を創作する際、前代の詩作に影響を受けながらも、楽府を改造して、自らの個性を盛り込んでいる。例えば、曹丕の雑詩の「俯視清水波 仰看明月光」にある「明月」を「拳頭望山月」の「山月」に変更したのは、李白自身の生活経験と美意識に融合したからである。「山月」は李白のほかの詩にもよく出てくる言葉で、彼の故郷四川省にある「峨眉山月」とつながることが多い。これは文人の目から見た月と言えよう。しかし、「静夜思」は楽府詩に属しているので、その根底には民間に共通している考え・民俗風習に符合しなければいけない性質を有している。中国では、「望郷」の思いを表す詩には、古くから「明月」という言葉が多く使われ、定番になっている。よって、李攀龍は「静夜思」の「山月」を「明月」に復元したのは、実は「月」の民俗イメージに従い、この詩をより通俗化するためである。そして、李攀龍が勝手に改竄したというよりも、この詩が読み続けられたうちにいつの間にか「山月」が「明月」に変わってしまい、李攀龍はその変化を記録しただけと考えたほうが合理的かもしれない。つまり、この詩は作られて千年近くを経つうちに、より口ずさみやすい言葉に置き換わってしまったのである。

#### 四、日中における詩の解釈の問題について

「静夜思」は、日本においても中国においても古典として継承されてきた作品であり、その解釈については、すでにさまざまに検討され、一定の読みが確立されている。しかし、字句の解釈に関しては、多岐にわたる場合がある。本稿では、主に「床」という字を考察したい。

管見の限りでは、日本で出版されている書物では、ほぼすべて「床」を「ベッド」・「寝台」、「床前」を「ベッドのあたり」という解釈に定着している。中国においてもすべての国語教科書では「床」を「ベッド」と解釈している。しかし、『辞海』（中華書局、1999年版）によれば、「床」という字には、次の3つの意味がある。

- ①ベッド・寝台
- ②胡床（腰かけ、「馬扎」ともいう）
- ③井床（井戸囲み）

「静夜思」における「床」の解釈について、中国ではこの3種類の説を主張する人がそれぞれいる。現在では、「ベッド」・「寝台」と解釈するのが主流ではあるが、研究者の間では、「胡床」を主張する人もいて、特に「井床（井戸囲み）」説を唱える論文が多くあり<sup>8)</sup>、注目に値する。以下、この3種類の解釈について、それぞれ考察してみたい。

## 1. 「ベッド」・「寝台」という解釈

現代中国語における「床」は、単独では「ベッド」という意味のみである。これは、現在中国において「ベッド」説が主流である主な原因だと考えられる。古代でも、「ベッド」が基本的な意味であり、詩の中に出てきた「床」の多くは「ベッド」を指している。例えば、唐代の「ベッド」は「匡床」と呼ばれており、唐詩にはよく登場している。

・願君解羅襦、一醉同匡床

（願はくは君 羅襦を解き、一酔して匡床を同じくせんことを）

（唐・喬知之「倡女行」、『全唐詩』第81卷）

・山人無事秋日長、白昼惺惺眠匡床

（山人 事無く 秋日長し、白昼 惺惺として匡床に眠る）

（唐・劉禹錫「觀棋歌送僧師西遊」、『全唐詩』第356卷）

「匡床」の形は現代のものとはやや違う。その名前のとおり、三面もしくは三面半にフレームを使用し、それにテントが張られているベッドである。現在の中国ではほとんど使われなくなったが、南方の農村部ではたまに見られる。『中国語大辞典』（1994年版、角川書店）では、「角型のベッド、＝筐床」と解説され、学校図書版の平成18年版教科書『中学校 国語3』には、「古い時代の寝台」という説明があり、イラストも付いている。また、吉川幸次郎はその著『新唐詩選』に、「床はベッドであるが、中国のベッドは西洋のそれぐらいの大きさ、あるいはそれ以上の大きさで、部屋の中央に位する。人は夜そこでねるばかりではない。昼間の何くれとない時間をも、その上でくつろぎつつすぐすとベッドの大きさ・置かれた位置・機能を指摘している。

## 2. 「胡床」という解釈

古代中国では、北方または西域の遊牧民たちは「胡人」と呼ばれ、「胡床」とは彼らが使う折り畳み式の椅子である。主に戸外の行事の席や休息のために用いられていた。「静夜思」にある「床」は「胡床」とであるという説は昔からあったが、注目されるようになったのは2008年に文物収蔵家馬未都が中央テレビ局の講座「百家講壇」で「家具収蔵」シリーズの講義を行った時、「彼

(李白)のコンテクストはとても明晰で、動きもはっきりしている。李白は胡床を掲げて、庭に座って、明月の下に故郷を思っているのである<sup>9)</sup>と発言してからである。その理由について、馬未都は以下のように述べている。

唐代の建築は戸と窓が小さい。そして、扉は板戸で、光は通さない。窓もとても小さいので、月光が室内に差し込むことがほとんど不可能である。とくに、窓に紙や綸子が張られていたら、光が部屋の中に入ったと言てよい。

これと同様な観点として、清の尚秉和は、唐代における寝室の別称「里間」という言い方の由来を考証する際、「此れ即ち今の正庁の東西里室、俗に曰く里間屋という。古人は其の厳密が箱に似ているを以て、故に名づく<sup>10)</sup>と解釈している。唐代の建築では、特に寝室の窓が少ないうえに狭い。天井部分に設置された窓も非常に小さい。月光が室内に差し込むことは可能としても、「霜」と勘違いされるほど地面が広い一面に月光を浴びることは考えられないわけである。よって、李白は室外にいる可能性が高い。しかも「胡床」に腰かけて、「頭を挙げて」月を見て、また「頭を低れて」故郷を思うということを馬未都が主張している。

馬未都が唱えた「胡床」説は、歴史的民俗的な視点から唐代の建築における窓が狭いという重要な特徴を論証した。しかし、この説は唱えられた当初には大きな反響を呼んだが、その後広く人々に受け入れられなかった。納得されない理由は、寒い秋の夜に、庭に出て、胡床に腰かけて頭を挙げたり下げたりする情景は、どこか違和感があり、読者にはイメージしにくいからであろう。いずれにしても、李白は室内ではなく、室外にいる可能性を明らかにしたことは大きな成果と言えよう。

### 3. 「井床」という解釈

現代中国語において単独では「ベッド」の意味しか持っていない「床」は、「牙床（歯ぐき）」「河床（川床）」「琴床（琴を置く台）」などのような「～床」の形の語彙になる場合、「～を載せる台」という意味をも持っている。「ベッド」は「床」の本義であり、「～を載せる台」の意味は「ベッド」の意味から転じたものと見られる。

さらにこの意味が発展して、「床」を「井戸囲み」という意味で使われたこともある。『古今韻会舉要<sup>11)</sup>』には、「床」について、「井幹、井桁なり。其の形は四角或いは八角なり」と記載している。「ベッド」と「床」とは形状と機能において、以下のような共通点を持っている。

- ①ベッドは四周に木の板が組み立てられており、井戸囲みと同じ、人を守る機能がある。
- ②井戸囲みにろくろを載せることはベッドに人を載せると同じ。

郭茂倩の『樂府詩集・舞曲歌辭』所収の『淮南王篇』には、「後園 鑿井銀作床 金瓶素綆汲寒漿」（後園 井を鑿ちて銀もて床を作り、金瓶 素綆 寒漿を汲む）という句があり、これは「床」を「井戸囲み」と解釈する最初の文献である。『淮南王篇』以後、「井戸囲み」ときたら、「銀床」または「玉床」という表現が多く使われるようになった。次のような用例が挙げられる。

- ・玲瓏映玉檻、澄澈瀉銀床  
(玲瓏として玉檻に映じ、澄澈として銀床に瀉ぐ)  
(唐・蘇味道「咏井」、『全唐詩』第65卷)
- ・梧桐落金井、一葉飛銀床  
(梧桐 金井に落ち、一葉 銀床に飛ぶ)  
(唐・李白「贈別舍人弟台卿之江南」、『全唐詩』第171卷)
- ・好風吹桃花、片片落銀床  
(好風 桃花を吹き、片片として銀床に落つ)  
(唐・貫休「古意九首」、『全唐詩』第826卷)
- ・鷄人報曉伝三唱、玉井金床轉轆轤  
(鷄人 曉を報じて伝ふること三唱、玉井 金床 轆轤を転ず)  
(五代十国・花蕊夫人「宮詞」、『全唐詩』第798卷)

これらの表現について、清の王琦はその著書『李太白全集』では、「古楽府には玉床金井の辞が多く有り、蓋し其の木石の美麗を言い、金玉の価値を云うのみ」と指摘している。井戸囲みの材料として使われた木材や石材は、金銀の価値に値するほど美しいと称賛することから、昔の文人は井戸に対して特別に抒情的な感情を持つことがわかる。

李白の有名な五言古詩「長干行」にも、次のような句がある。

- ・妾髮初覆額、折花門前劇。郎騎竹馬來、繞床弄青梅  
(妾は髮 初めて額を覆う、花を折つて門前に劇る。郎は竹馬に騎して来たり、床を繞りて青梅を弄す)

ここでいう「床」は井戸囲みを指す。この詩は幼い頃の恋と知らずに恋している童男童女の天心爛漫、純粹無垢の恋を表している。日本の場合、『伊勢物語』の「筒井筒」ではこれと類似した情景が描かれている。

「静夜思」における「床」を「井戸囲み」と解釈する説は最近新しく出たものではなく、約20年前からすでに提唱されている。今まで見た資料では、この説が最も早く唱えられたのは1991年に出版した『唐宋詩詞三百首』<sup>12)</sup>である。李白の「静夜思」について、「(床は)古義では『井欄』(井戸囲み、引用者注)とも意味する。『韻会』<sup>13)</sup>では『床』を『井幹』といい、井戸の木欄である。ここでの『床前』は井戸囲みの前を指す」という注釈がついている。それから、『唐宋詩詞精華』(詩卷)<sup>14)</sup>では、「静夜思」の注釈について、「床は臥床と注されることが多いが、井戸囲みの意味もある」と記されている。また、張天健の『唐詩答疑録』<sup>15)</sup>には、冒頭に置かれた文章は「李白『静夜思』『床前明月光』の疑い」であり、作者は明確に「井床」説を主張している。これらの解釈・説明はすべて「井床」説を裏付けている。

「井戸囲み」という解釈は従来の「ベッド」説より優れている。この解釈を取ると、詩の情景はより合理的で想像しやすく、作者の「思郷の念」をより深く表現することができる。「合理的」というのは、李白は室内にある「ベッド」の前に「霜」が降ったと「疑う」より、室外にある井戸の前に広がっている一面の銀色の月光を見て、秋という季節を意識して、月光を「霜」と勘違いしたほうが読者に納得されやすいからである。一方、「思郷の念」をより深く表現するとは、「井

戸」と「故郷」とは古くから深い関わりを持っているからである。この問題に関して、民俗学者の宣炳善は「古代において『井戸』は故郷の象徴である」と言い、「原始人は、井戸を発明して初めて洪水の頻繁に起こる川や湖から離れることができ、比較的 안전한地域に定住することを可能にした。しかし、古代では井戸を掘ることがとても困難な作業で、人々は井戸のまわりに集まって住む習慣があった。一つの村に一つの井戸しか持っていないのが普通であった<sup>16)</sup>と指摘している。公共の井戸を掘ると、人が集まり周囲に住居ができるので、市(まち)を「市井」といい、郷村を「郷井」というのである。

中国では、昔から井戸が故郷の象徴と見なされ、重視されている。「背井離郷」(井戸のほとりに人が集まり住んでいる故郷を捨てて、他郷に移りゆくこと)という成語があるように、井戸から離れることは故郷を離れ、あちらこちら放浪することを意味するので、昔の人にとっては非常につらい人生経験である。

宣炳善は、「『静夜思』の中の『床』は間違いなく井戸囲みのことである。しかも、井戸の民俗イメージは全詩の核心である」と主張している。

もし「井床」の解釈が成立すれば、この詩の鑑賞に大きな影響をもたらすと思う。まず、「ベッド」が完全に登場しなくなることにより、今までのように、作者(李白)は部屋にいて、ベッドに寝転んでいるまたは座っている姿勢が読み取れなくなる。そのかわりに、寒い秋の夜、李白は眠れなくて外(庭も可能)に出ている。寒々と白く輝いている月光に照らされた井戸のほとりは、まるで霜が降りたように見える。井戸を見て故郷を思い、月を見て家族のことを思うという情景が想像できる。「床」を「ベッド」と理解するなら、李白の姿勢や居場所など、どうしても不自然なところがあるのに対して、「井戸囲み」と解釈すれば、流暢に詠みあげられ、情にも理にもかなった内容になる。

もう一つは、「思郷」の主題を表現する媒介物は「月」だけでなく、「井戸」も同じような、もしくはそれ以上重要な役割を果たすことになる。今までの鑑賞では、月を媒介とした望郷の念という面に重点を置きがちであるが、この作品の根底には、井戸と月という二重の媒介物を通して主題を表現している。李白は井戸と月光とを二重写しに表現している。

## 五、井戸と月の民俗イメージ

水は生活の上で欠かせないものである。昔のように井戸を掘る技術力が発達しなかった時代には、水を汲み上げる井戸は特に重要視されていた。これがさらに発展して、井戸は「故郷」の象徴と見られるようになったのである。「井戸を以て故郷を思う」というモチーフは多くの詩歌に使われている。例として以下の3首を挙げる。

- ・不見定王城旧処、長懷賈傅井依然

(定王の城の旧処を見ず、長く賈傅の井の依然たるを懐ふ)

(唐・杜甫「清明二首」、『全唐詩』第233巻)

- ・繚繞万家井、往来車馬塵

(繚繞たる万家の井、往来 車馬の塵)

(唐・韋応物「楽府雑曲・鼓吹曲辞・有所思」、『全唐詩』第17巻)



・郷井従離別、窮辺触目愁。生人居外地、塞雪下中秋

(郷井 離別により、窮辺 触目愁ふ。生人 外地に居て、塞雪 中秋に下る)

(唐・劉得仁「塞上行作」、『全唐詩』第544卷)

また、「井戸」と「故郷」に関わる詩と言えば、陶淵明の「帰園田居五首」が特に有名である。其四には、次のような句がある。

・徘徊丘隴間、依依昔人居。井竈有遺処、桑竹残朽株

(徘徊す丘隴の間、依依たり昔人の居。井竈 遺処有り、桑竹 朽株を残す)

詩人の田園生活に対する憧れを表している。陶淵明は字が「元亮」であり、この詩によって、「元亮井」が「生まれ育った土地」・「故郷」の代名詞になった。

この詩を受け継いで、李商隱はその詩「二月二日」に、「万里憶帰元亮井、三年従事垂夫營」(万里 元亮井に帰るを憶ひ、三年従事す 垂夫の營)という句を綴った。この詩を作ったのは、李商隱が故郷から遠く離れたところで官職に就き、間もなく3年経とうとした時期である。陶淵明のように故郷に帰ることを待ち望んでいるが、帰りたくても帰れないという詩人の内心の苦悶を語る内容である。「井戸を以て故郷を思う」という民俗イメージに合致している。

一方、月は詩によく詠われるものであり、特に李白の場合、酒とともに彼の詩において最も好んで歌われるものである。月あるいは月光が李白の心をとらえた原因として、松浦友久は、①月の永遠性・不変性といった性格、②超越性、あるいは不可触性、③月光のもつ感覚的な特色、とくにその透明・清澄な感覚、の3点を指摘している<sup>17)</sup>。いずれも文人の目から見た月あるいは月光の特徴といえよう。

しかし、民俗的視点から見れば、植木久行の『唐詩解釈辞典』<sup>18)</sup>には杜甫の「月夜」をめぐって、次のような指摘がある。

月は古来、あまねく天地を照らすところから、時間・空間を異にする両者を結び付けるものとして歌われ、従って離別の人や昔の人をしのぶ素材として用いられることが多い。

親しい人と遠く離れていても同じ月を見ており、同じ月光に照らされているという思いを表すために月が設置されるのが一般的である。井戸は故郷を思い出す媒介物として存在するのに対して、月は人を思う素材として歌われたものである。その用例の数量的な多さは言うまでもない。

・海上生明月、天涯共此時。情人怨遙夜、竟夕起相思

(海上 明月を生じ、天涯 此の時を共にす。情人 遙夜を怨み、竟夕起ちて相い思ふ)

(唐・張九齡「望月懷遠」、『全唐詩』第48卷)

・戍鼓斷人行、辺秋一雁声。露從今夜白、月是故郷明

(戍鼓 人行断え、辺秋 一雁の声。露は今夜より白く、月は是れ故郷の明かり)

(唐・杜甫「月夜憶舎弟」、『全唐詩』第225卷)

・今夜月明人尽望 不知秋思在誰家

(今夜 月明 人尽く望むも、知らず 秋思 誰が家にか在る)

(唐・王建「十五夜望月」、『全唐詩』第301卷)

一方、中国では「嫦娥奔月」<sup>19)</sup>という神話伝説が有名で広く知れ渡っている。この伝説が誕生してから、月は孤独と寂寥の象徴になり、同時に再会を祈る象徴にもなっている。嫦娥が夫の後羿と別れ、一人で月宮で寂しく暮らすようになった情景を、李商隠は「嫦娥」に、「嫦娥応悔偷靈藥、碧海青天夜夜心」(嫦娥 応に悔ゆるべし 靈藥を偷みしを、碧海青天 夜夜の心)と表現し、嫦娥の孤独をしみじみと物語っている。

李白の詩に頻繁に出てくる月は、まさに李白の内心の孤独を表現していると思われる。再び「静夜思」の創作背景を見れば、李白の生涯について不明な点が多いため、この詩の制作年代を確定することはできないが、李白が27歳前後、湖北省安陸県(現、湖北省安陸市)または金陵小長干(現、江蘇省南京市)で作られたことが推定されている<sup>20)</sup>。つまり、李白は当時故郷の四川省から遠く離れた場所にいたことは間違いない。また、宇野直人は、李白は長江を下り、希望に満ちて職を探し始めたが、なかなかうまく行かなくて、心身ともにストレスと疲れが溜まってしまい絶望のどん底にいたと推測している<sup>21)</sup>。

ちなみに、詩人の孤独な心情を表すもう一つの言葉を見過ごしてはならない。それは「霜」である。西村諭は「李白『静夜思』」<sup>22)</sup>に、以下のような見解を述べている。

こうして見ると、「静夜思」の「霜」もやはり、視覚的な白さ、触覚的な冷たさの二つを想像させることはもちろん、離別の悲哀をそそる題材として欠くべからざるものであると考えなければならない。月光を月光として、孤独を孤独として、それぞれ強調しているのである。李白が月光を重ねてみたものが雪や露などではなく「霜」であったことは、必然だったのであり、それは李白独特のものだ。

「霜」は秋を表す季語として用いられ、李白の詩にはよく用いられる語である。また、一つの媒介として、井戸と月を繋げる役割も果たしている。そして、この詩に設定された時は霜の降るような寒い秋の深夜であることをも暗示している。

井戸のほとりと霜を描写する李白の詩はほかにもある。七言古詩「長相思」には、「長相思、在長安。絡緯秋啼金井闌、微霜淒淒簾色寒」(長相思 長安に在り。絡緯 秋啼く 金井の闌、微霜 淒淒として簾色寒し)とある。ここでいう「絡緯」はクツワムシのことで、「金井」は井戸の美称である。「簾」は竹で編んだむしろのことを指す。詩の意味は、「私の思い続けている人が長安にいる。秋になってクツワムシが井戸のそばで啼いている。うっすらと降った霜は寒ざむしく見えて、私が座っているむしろも寒くてわびしい」となる。この詩には、秋・霜・井戸の3要素が揃っており、季節感は「静夜思」と似ているが、ただ、男女の思いを表現する主題は「静夜思」の「望郷の念」とは異なっている。

## 六、おわりに

「静夜思」は千何百年前に創作された作品で、その長く広い伝承の中で、文字の異同や解釈の異同が生まれてもおかしくない。かつ、詩歌には詩歌ゆえの多様な解釈が許容される。それこそこの詩の魅力と言えよう。

「静夜思」についての従来の研究では、「月」を媒介とした望郷の念という面に重点を置くのが一般的である。日中に普及している詩の本文に相違があり、また李白は前代の詩に影響を受けてこの詩を創作したという指摘もしばしば見ることができる。しかし、この詩の樂府詩としての特徴・性質を見落とし、その文学性だけを検討することは一面的である。本稿では、民俗的視点から、中国における詩の本文の変遷について考察して、李白の使った「山月」が後に「明月」に変更されたことから、一般庶民の「明月」に対する愛着を見ることができると注目した。さらに、「床」という字の解釈をめぐる、唐代の建築や井戸の民俗イメージなどを勘案して、この詩の「床」は「井戸囲み」と解釈する方が適切という提案を試みた。すると「望郷」のシンボルとして「月」を捉えるというこれまでの解釈に止まらず、「月を以て人を思う」「井戸を以て故郷を思う」という解釈となる。研究者たちの間だけでなく、国語の教育現場にもこのような考え方を取り入れ、今まで当たり前のように教わってきた、また教えてきた「静夜思」を見直す必要があると思う。

## 注

- 1) 朱炯遠『唐詩三百首訳注評』遼寧古籍出版社、1996年10月。
- 2) 王瑤「中国詩歌発展講話」江蘇文芸出版社、2008年1月。
- 3) 武部利男『李白』岩波書店、1958年10月。
- 4) 武部利男「『静夜思』について」『吉川博士退休記念中国文学論集』筑摩書房、1968年3月。  
森瀬寿三「李白『静夜思』をめぐる - 詩における解釈と校定」『関西大学文学論集』第38巻関西大学文学会、1989年3月。
- 5) 「建安」(196～220年)というのは後漢末の年号であるが、漢から魏にかけての、五言詩形成期の文学時代を、一口に「建安」という。建安年間に詠まれた気概と風格のある詩を指している。これらの詩は、のちに「建安体」と呼ばれ、詩史に一時期を画したと言われている。
- 6) 『泊園』第34号、関西大学東西学術研究所、1995年9月。
- 7) 中国李白研究会は1987年11月に設立され、文化部に所属する全国的な学術団体である。
- 8) 論文では、王晓祥「『床前明月光』新解」(『浙江師大学報』1986年第4期)、姜同「李白『静夜思』『床』字新解考釈」(『黄河水利職業技術学院学報』第17卷1期、2005年1月)、林更生「唐朝の『床』と『井』」(『科学と文化』福建省科学技術協会、2006年2月)などがある。
- 9) 馬未都『馬未都説収蔵 - 家具編』中華書局、2007年。講義を行った原稿に基づいて刊行した本である。
- 10) 尚秉和『歴代社会風俗事物考』中国書店、2001年1月。
- 11) 元代に編纂された韻書の一つ。黄公紹の『古今韻会』(現存せず)に対して、注釈が煩雑であるため、同郷の熊忠が作ったダイジェスト版である。
- 12) 金用『唐宋詩詞三百首』(論文集)巴蜀書社(成都)、1990年。
- 13) 『古今韻会举要』のことである。前掲注11参照。
- 14) 耿建華『唐宋詩詞精訳』(詩卷)黄河出版社(済南)、1996年。
- 15) 張天健『唐詩答疑録』中国文聯出版社(北京)、2004年。
- 16) 宣炳善「李白『静夜思』的民俗学闡釈 - 兼論樂府傳播的民俗機制」『民間文学論壇』中国人民大学、1998年9月。

- 17) 松浦友久『李白－詩と心象』社会思想社、1984年4月。
- 18) 松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』、大修館書店、1987年11月。
- 19) 「嫦娥奔月」とは、后羿の妻である嫦娥が、后羿が西王母からもらった不老不死の霊薬を独り占めにして、一人で月へ昇り月宮で寂しく暮らすことになったという中秋節の故事である。
- 20) 田部井文雄『唐詩三百首詳解』、孫鴻亮「『静夜思』考」、『延安大学学报』（1998年）などの資料による。
- 21) 宇野直人 江原正士『李白－巨大なる野放図』平凡社、2009年2月。
- 22) この論文は田部井文雄編集『漢文教育の諸相』（大修館書店、2005年12月）に収録されている。

**【付記】** 本稿は、日本文学協会第30回研究発表大会（2010年6月26日 於フェリス女学院大学）における口頭発表「『静夜思』の教材研究－中国での解釈を視野に入れて」に基づき、加筆修正したものです。ご教示を賜りました諸先生方に御礼申し上げます。